

まで出掛けた。終に赤水までゆく道々の店で、筆や墨はいらぬかと云ふと、丸八や黒松でとるから入らぬとの答へ、然し其よりも品はよくて直段は安いと云ふので夫でも入らぬかい、横山の清太郎氏も私のは良いに安いと云ふので五兩も買ふて呉れたと云ふと、では一つ見せいと云ふ工合で、段々景氣がついて彼是れ三圓二十錢ほどうった。夜宿の主人に聞くと、此島には役場が二ヶ所、學校が五ヶ所、有村には温泉があつて宿も木賃位はあるとの話で、一先づ鹿兒島へ歸つて多少の仕入れをして、再び来ようと、往復三錢の航海を思ひつゝ床についた。翌朝横山の店を一二尋ねて六十錢餘賣つての歸途、小供の持つて居る鯛と筆との交換を試みた處、小供は喜んで持つて來るので、風呂敷一つになつた、かくて、午後一時鹿兒島の川寄の宅に歸つた。夫から片川を訪ひ昨日來の話をして、中筆千本を分

▽藤村信虎氏

けて貰ふやうにしてをいて、丸八に行き鉛筆を二ゴロス買入れて歸りがけ太田へ寄つたら、川西が戻つて居る。今夜は一杯やらうから泊つて行けと云ふ、而し荷物がそのまゝにしてあるから、是非行かねばならぬ、どうか荷は早く出して呉れと頼んでをいて、四時の船に乗込んだ。横山に着いてから中筆を八百本清太郎氏の處にをき、麓を四五軒廻ると夜に入つたので、僅か五六十錢しか賣らなかつた。明る日は、横山源左衛門氏の愛顧によつて、小池を廻つて赤生原行きの道中で、一圓五六十錢商ひ、武村の二軒で二圓三十錢ばかりで、此晩は上野七藏氏に泊る。翌日は藤野の學校に行つて一本を二錢に負けて五百本うった、其外に小筆朱墨鉛筆など合計十八圓五六十錢の商賣をした。其日は同じく七藏氏宅へ泊つて翌日は藤野の各店をまわり三圓ほど商して西堂村に出て、桶屋喜之助宅へ宿泊し

△藤村信虎氏

此所では一圓七十錢うり、其翌二俣で四五十錢、夫から松浦より白濱に出で一圓四五十錢賣り、直に高尾村に出で黒神に行つて、此地の學校で四五十錢商つた。幸ひ温泉があるので、二夜も泊つた、而して瀬戸に出で二圓ばかり賣り、有村の上原源太郎氏方に宿して、學校役場やらで五六圓商ひ、入湯旁々三日ばかり遊んでから、湯の村に出で寺の前の伊人宅へ泊る。醫院や寺などで三圓餘賣り、野尻赤水を経て四圓ほど商つて清太郎氏へ一泊して、鹿兒島に戻つた、そして片川で荷物を仕入れて、今度は垂水から古江、大根占小根占の方へ行かうと用意した、片川で三十圓、川西で七圓、丸八で五圓ほど買入れ、翌日の雨降りも構はず廣馬場の町役場に志して三圓ばかり、大門口から下荒田に出で、荒田役場で一圓餘、其他彼是れで四兩二分うつて、垂水に渡り川井田に宿した。翌日郡役所で村長會

▽藤村信虎氏.....

議があると云ふので行つた、而して、出放題なホラと押問答の果てに、筆墨合して二十三圓四十錢と云ふ商をして、今度は警察署で六十錢ばかり賣つて宿に戻つてみると、先の村長連が九人泊つてゐて、今日の筆をモウ十四五本呉れ仲々書良いと云ふので又買つて、大崎の邊まで来てはどうかとの話。翌日は垂水の役場へ行つて墨十五挺と其外で計四圓三十錢の商、夫から町で十二圓ばかり賣つて、宿に歸つて一杯やつてゐる處に、突然巡査が二人上つて来て、筆屋は汝か、一寸尋ねたい事があるから警察署で同行せよと云ふので、何の事かさつぱり分らぬが、食事がすみ次第行きますと答へるけれど、飯はあとから食へ、何に背くか、立て立たんかと云ひつゝ、笛を吹いたので、忽ち八九人の巡査が出て来た。では行きますと立つた前後左右に十名の査公がついてゐる、土地の人々は口々に、昨日の筆屋

△藤村信虎氏.....

ぢやないか、どんな悪いことをしたのだらうと警察署は人の山、私  
 はまると分らねが、上れと云ふまゝに、下駄をぬいで上つた。一時  
 間ほど待つて居ると警部が二人出て来て言ふまゝに立つと、今度は  
 三四人の巡査が白洲に來いと連れて行つた。向ふの upper 段に警部が二  
 名、巡査が二名、狭い庭に三尺ばかり間をおひて立たせた後に四名の  
 巡査が番をする容子、オマへは何處の者かとの尋問が始つた、自分  
 は種々と自分の身元を申述べた。ではよいから表へ廻れと四名の查  
 公と表に出た。モウ歸れと云ふかと思ひの外足留の中に入れられた、  
 而して、握り飯二つと漬物二切、こんなものでは仕方がないと云つ  
 た處で駄目な事、眞ッ暗中で漸う虫をやしなうた。他にも人が居る  
 やうであるから、聲をかけるかと官林盗伐で入れられた、大根占の者  
 と知つた。だん／＼話を聞くと、飯野の大河平の殿様を殺した嫌疑

が、自分にかゝつた事も分つた。  
 鹿兒島から警部と刑事巡査が來て取調べを受けた、處で犯罪者は足  
 の親指を二つに切られてをる、でオマへではない、氣の毒であつた  
 モウ好いから歸れ事は済んだ。と云はれた處ですまぬのは私の氣持  
 何故其ほど明かな證據があるのなら、始めから夫を調べぬのか、歸  
 れと云つてもたゞでは歸らぬ、同宿した村長らを初め、土地の人か  
 ら筆屋は悪事を働く奴ぢやと思はれた恥は、どうするかと怒鳴つて  
 やると、見損いは許して呉れよと色々慰められながら、巡査に見送  
 られて宿に歸つた。此時、何事も實際に因縁事であると云ふことを  
 感じた、で直様川井田の後に在る寺に參詣して、自分の立腹したこ  
 とを懺悔し、併せて彼等の御加護のほどを謝した。其翌朝であつた  
 警察から小使が來て又來いと云ふ、何事かと行つてみると仲直りに

筆を買ふてやるとの事で澤山賣つて、歸つてみると宿には郡役所から使が来てゐるので、又すぐ行つたら、昨日の一件は氣の毒だつたぬ、で機嫌直しに筆でも買つてやらうと云ふ、此時ちようど各村長も居合せて七八名から大變ヒイキに預つて澤山買つて貰つた。翌朝は新城の方へ出立して、途中久々木原の店で六七圓商ひ、新城村役場では、折柄地租改正の會議中であつた有志らから三圓八十錢ばかり買つて頂いた上、宿まで周旋して呉れて酒肴の馳走、まるで客の待遇で宮本氏に厄介になつた。翌日は學校に訪づれて十八圓餘、麓で二圓餘、それから花岡に出た。此所の役場で七圓餘、學校では二十五圓餘賣つて、右田旅館に入つて、町でも二軒の店へ五圓ほど商した、夜、宿の主人に鹿兒島へ仕入れに行きたいから荷物を頼むと云ふと、快く引受けて呉れ其上、吉江の八木善兵衛同總太郎

は私の親類だから、その船で行くがよいと下男に案内さして呉れた。鹿兒島に着いて川崎宅へ行き翌、早朝より川西を訪ふたら君は酒と女には目が見えぬから、又使つて了つて借に來たのだらうと、笑ひ奥じつゝ迎へた、否や今度はさうではない、實は中字の安物を分けて貰う相談に來た、現金で拂ふ代り、朝商ひだからうんと負けるものよと云ひつゝ、千宛五種見せると云ふと驚いたやうだつた、品が揃はぬなら有丈け出してと云つて、筆をとりませ三千と墨を五十挺づゝ十種注文して(代六十三圓)有品だけ受取つて二個に荷造りをしてをき、其から丸八で鉛筆を十七圓ほど仕入れ、是を一個に都合三個の荷を總太郎船に積み込んで送つてをいて、自分は一泊して後から行くことにした。翌日片川で九十七圓ばかり品を調べて夕方乗船、翌日古江に上陸して、先の荷と一處に駄便から鹿屋の牧金七宅

▽藤村信虎氏

へ送つてをき、自分は花岡の右田旅館に一泊して、鹿屋に向つた、こゝには寺院、小林區や店もあるので十四五圓賣つた。明る日は役場に行つた、處が垂水の一件で村長とも知合ひだから、ために都合よく二十圓ばかり買つて貰つた、夫から警察學校で八九圓商ひ、翌日から十二三圓賣つて串良の町に出て、原口旅館に泊つた。翌朝は役場や學校に行つて二十二圓ばかり、他に六七圓商して夜に入つた、明る朝は此を立つて東串良に向ひ、又役場學校でもあひにく主任の人は不在だつたけど八圓ばかり賣り、大崎の方に行き、學校で十三圓、役場で二十一圓と云ふ商賣をした。其夜は三浦三太郎宅に泊り次の二日は、大崎假宿を商つて都合十五圓餘賣つた、夫から志布志へ出やうと思つてゐたのに、突然足痛が起つたため中止して居たら、妻子二人して尋ねて來た。で久し振り親子夫婦して二三日滞

在して志布志に行くべく馬を用意して、同地の俣木武吉氏を尋ねて行つた。此人は誠に好い人で、私らの事を眞實に世話して呉れた、其のため鍋屋では五十四圓の品をとつてくれた。夫から役場や町で三十五圓ばかり商ひ、一週間ほどしてから羽見の方に出て、こゝの役場や學校でも十二圓ばかり賣つた、唐人町、高山町、始良町で大分商つての歸途紺屋町に出た、こゝの新店で一休みして主人に相談をかけ、自分が持つて居る丈の荷を買ふて呉れと云ふに、三十五圓にせよと云ふので、では荷物は預けてをくから今夜篤と考へてみて欲しいと言をいて、宿に一應戻つて翌朝行つたら、五十圓まで出さうと、其では小間物を加へて五十五圓と云ふ話に決して手を打つた。そして鹿兒島の服部の内へ戻つた時、懷中には三百八十五圓ほどあつた。奈良の山城屋利八、大阪の楠本茂助と兩製墨屋へ各々百圓づ

▽藤村信虎氏

、なほ大阪の林重助製筆屋へ百圓送つた、殘金八十五圓を以て片川、川西、丸八の各仕入れを濟し、三日間休業して夫から平太郎と親子して市内をうり廻つた。三日ばかり立て汲池貞吉と服部旅館に會した處が、平太郎が云ふには私をランプ賣りに出してくれと、では許さうと云ふことにして今日賣つた十圓を持つて貞吉と二人して谷山方面へ出て行つた。二三日して彼らは歸つた。そして同行した貞吉の話に、生産町の三十六番地に、二階建ての一才した家がある借賃は二圓五十錢とか云ふ、で自分が半分は出すから借家をして働かうではないかとの相談。よからうと家主たる田中氏に會うて敷金なしに家賃先拂の約束で金を渡し、明日から引移ることゝした。翌日は宿屋の拂をすまして、タツタ風呂敷包み一個で借家に移つたが道具と云つたら何さへない、鍋釜と茶碗、膳と火鉢、これだけ買

うてあとの品は損金を出して、各所から借入れて間に合はした。一寸寝起する位の準備に三日もかゝつて、四日目から市内を賣り歩いた。教習所や三州舎で七八圓商つた。其中に平太郎のランプ賣も面白くないと云ふので、又もとの筆墨にもどつたが、彼是れするうち夏が来たので、今度は氷賣りを初め、一斤十二錢五厘の氷を、氷水一杯二錢に賣ると云ふあんばい。折節ヤツテ来たのが熊野萩原の、花木關平、横山松次の兩人が折角自分をたよつて来たのだから、まさか置かぬ譯にもゆかず氷店に使ふことにした、そこへ又矢野村の國助と、豊後の安永倉次の二人が便つて来たので、之も氷店へ世話することにした。然し、氷の元が高いので儲は餘りないが、内は内外は外で盛に賣り出してゐる中、花瓦神社の祭禮が来た、で板小屋打つて煮賣店を出して、二人は此方に、他の二人は氷店の方にと各

▽藤村信虎氏

手分けしてやり初めたら、生憎と參詣の多くなる頃大風雨に襲はれたため、小屋は吹きこぼされるやうで、二十圓ほどアベコベに損してしまつた。翌日は其時の牛肉を鶴焼料理にして市中を賣歩いたが之も又失敗、處が氷が市内に品切れと云ふので一斤四十五錢の高價に上つた、て早速北海道に氷を注文したら、運悪く何かの間違いで數十日も後から着いた上、氷は解けて小塊しか残つて居ない有様。實に世の中は思ふやうにゆかぬ情なさに、再び元の筆屋になりかへつた。扱てかうなつてみると前から使つてゐた二名の者は不要になつたので、路用金から宿拂ひまでしてやつて歸した、安永と花木の兩人には筆でも賣らせたらと思ふから、相談したら彼らは久留米でケイコした玩具を作つて賣つてみたいから、二人に十圓貸して呉れよと云ふのでさうした。

▽藤村信虎氏.....

大阪の小妻村の樋口清左衛門なるもの來つて頼る。折節地租改正の時に當れるを幸に、平太郎と清左衛門の三人連にて福山に渡り一泊して市成に行き商をやつた、自分は百引、高隈、鹿屋、申良、大崎、菱田より志布志に出づべく、他は恒吉、岩川を経て末吉、松山そして志布志の俣木武吉宿屋にて出會の約束をなし、何れが餘計に商が出来るか競賣して見らんと、荷物を分けて行商しつゝ十一ヶ日を費して志布志に到着した。他の二人は其前日に到着し居たが、オマへ達は二人で私は一人、どうで君等が勝であらうと賣上金を百八十圓出した。平太郎は賣上金十七圓餘を出し、清左衛門は漸く四十圓餘出した。それから三人の残り荷物を取り調べ、福島の今町に行つた福島は中の町に平太郎、樋口が上之町に、自分は今町と手分けて出かけ、夜は中之町に出會すべく約して行商を始めた。それから平太

▽藤村信虎氏.....

郎を連れて戸井に行き油津に出た。段々賣り歩いて此處に泊り、翌日「オビ」に登りて見れば樋口が来て居たから荷物を平太郎と樋口に委して自分は鹿兒島に飯つた。そして二三日休む内、榎崎伊三郎と云へる人が川西氏と同道して來た。澤山硯石があるそうだが賣つては呉れまいかとの相談であつた。二百圓位はあらうと云ふと百二十圓で買ふと川西が口をきつた。つまり榎崎氏の仲裁で、百八十圓丈の筆と交換する事になつた。それから川西の處へ行き硯石と交換せる筆墨を調べて受取つた。翌日片川に行き五十圓の筆墨を買ひ、折節歸つて來た横山松次に三十四五圓の品を貸し種ヶ島に渡らせた。玩具作りの安永と花木の兩人へ五十圓丈の筆墨を貸して伊集院より川内の方へやつた。自分は樋口と平太郎の歸宅をまつて重富から加治木、濱の市、國分、敷根まで行き十日間商して歸り、市内から谷

山へ行商して歸つた。二人は九十四圓餘を賣つて來た。處で二百四五十圓と賣り残り四五十圓を持たせ都之城より宮崎、延岡邊にゆかした。處が其後二ヶ年半も立つたが何の音信も無く何處に居るやら更に分らぬ、心當りの處へは書面を出して見たが一向分らぬ、一年立つた時伊豫の松山で見たと云ふ人もあるが確實な事が分らぬ、其後一年立ちて博多東町八百善より今出立したとの通知があつたで命に別條なき事丈は安心した。子を思ふ親心には、ひたすら今日か今日かと待ち居る内不幸にも重症の梅毒にかゝつて起居も自由もなからぬ身となつたで連れに行く事も出来ぬ如何はせんと案ずる中、久留米小頭町三丁目山本元三郎即ち平太郎が伯父より手紙が來た。其書面に依ると、平太郎は四五日滞在して家の作太郎と一處に、金剛永を賣りに行くとして佐賀地方へ出頭したとの知せであつた。自分は



平太郎が所在が分つたので先づ安心して知人天島の経験せる梅毒の妙薬を勧められて四廻り服用したら立派に良くなつたモウ一廻り吞めば全治、再發の恐れはなしとの勧めに依り其一廻りの薬を吞み吞み久留米に平太郎を迎ひに行つた。自分は起居もならぬ大病、平太郎は歸つて來ぬ、眞に困つた。まだ全治には至らぬが一廻りの薬を持ちて尋ねて來た次第を陳べた。先方では平太郎はまだ佐賀から歸らぬから其歸るまでは裏の離れ座敷で病後の疲勞を休めなさいとの事で、彼是れ丁寧な響應に預つた、平太郎は自分の來て居るのを驚いたが親の心になると又格別子を案ずる餘り病後の疲れを忘れて尋ねて來た、それは兎に角マゝオマへも元氣で何より何よりそして彼の荷物は樋口とオマへと二人で吞んでしまつたのか。樋口とは伊豫で別れた、今は一文の貯もない二千圓位の品を持ちながら一文の金

も送らぬのみならず行衛も知らさぬ馬鹿に入らぬ心配をさせたじやないか。私も此に一週間も世話になつてから明朝は一處に歸らう平太郎は多少の金を得た上でなければ歸らぬと云ふから自分も病氣の中から尋ねて來た心及び母が内で心配して居る心情を察して是非に一處に歸つて呉れよと頼むがように勧める、側から主人山本氏も父上と一處に歸りなさるが良いと勧めて呉れたで翌朝連立て出發し博多から光運丸汽船にて歸つた。それからランプ商賣を始め一方には筆墨、一方にはランプ、大阪に筆墨の仕入れと同時にランプ類を仕入れた。それから筑後の柳川外町硝子製造所へ六十圓の注文をなし、ホヤを取り寄せた。籠に入れた六十圓のホヤが店の庭に着いた時は當時の店では餘程賑やかであつた。段々商をする内に筆墨よりもランプ商の方が良好の様になつたから斷然ランプ商専門になつた

近所に河野の板硝子等を一切引受けて賣捌き服部太郎左衛門と云ふ人が板硝子六箱ばかり持つて居た。自分は夫れに見ならつて大阪に行つて板硝子硝子器一切を仕入れ、柳川には毎月一二回仕入れに行き、着々歩を進める事に勉めた。一日、大阪西區立賣堀南通り五丁目加治田九平と云ふ硝子屋を尋ねた。主人は云ふオマへは鹿兒島なら此隣の百四十七銀行の鹿兒島支店に、貴國の人が澤山來て居る、貴國の人は仲々正直で良いから極勉強して差上るとの挨拶であつた。自分は今まで筆墨の仕入には聊か經驗あるも硝子板は今度が始めてあるから何かと能く教へて貰ひ度と頼むと、先方も深切に教へて呉れ、都合取り合せて十箱仕入れた。此際不圖念佛を稱へたので先方では大に注目し、御客は眞宗ですか、内の檀那は非常な信仰者である、御内佛に参りて下さいと、自分は案内に連れられて佛前に座

し立派な莊殿なる佛壇を拜しては其まゝ立つに忍びぬから讀經念佛御文章を拜讀した。佛前の禮拜を終りて見れば、主人は家族と一同謹聽して居られたのは驚いた。主人は大に喜んで非常な御馳走を出し酒までも吞ませた。それより暇乞して南區惠美須橋南詰寺村硝子製造所に行つたが意を果さず川崎硝子製造所に行つたが是又先きのイカリ印と同様に特約品とて相談が出来なかつた。併し此品の説明文は委しく聞いた、此「ゑす」印のホヤは鋪印より品質は餘程上等らしい、何れも問屋に特約がしてあるから直接貴殿に約束する譯に行かぬとの事であつた、世の中の事は多くは金の力で左右する事實を發見したと云ふのは爰に金の必要に迫つて居るらしい風を見て取つた自分は、直に百圓紙幣を目前に出して荷物の相談をした。今迄頑張つて居た番頭もどんな品が入用ですかと相談に乗つた。彼是れ

△藤村信虎氏……………

相談の結果、三分五百打、五分五百打、八分百打、空気が一番二番三番何程入つても一個づつ揃へて山中廻送店に出して呉れよ、二分は五百打、念を入れて作り上げて上げると請合つて、それから難波に二三ヶ所の製造所あるを聞き尋ねて行つたが相談が出来ぬ、歸宿の途にてランプの釣金賣りに逢かたからオマへは何處に行くか、ハイ私は駒井氏方に行きかけと、端なく語の廣島ナマリを使ふより何となく懐かしく様々な話を交した。彼は云ふ天神橋通り三丁目國平嘉吉と云へば分ります。私は七年前より釣金製造をやつて居る、どうか取つて下さい、大阪の間屋には皆私の方よりやりませすがアナタとは國同士の事であるから問屋にやるよりも安くしてあげるから、それでは今夜遊びに来て頂きたいと分れ桐重の竹ホヤ製造所に行き、竹ホヤ四分上中下百打宛三通り、三分半上中下百打宛三通りそれより

御所天神の西側硝子製造所木村宇平方に行き五分差二分差取合せ六十圓買ふた。宇平氏の丁寧なる馳走にあい夕方大西の定宿に歸つた。聽て國平が來たので種々廣島話を肴に一杯を傾けた。二分つり三分つり金つり空気がつりを買い入れた。處が百五十圓餘り支拂が出来ない様になつたので、支拂の荷物は受取り、残りは爲替を附けて商船會社に頼みて下りた。それより年々大阪に二度上りて注文仕入れをし、明治二十五年頃には千圓餘り儲けて居たが大火の爲めに失敗した。其時本願寺の庭に持ち出した品物は山籠に九個と、一個二十七圓の引出戸棚四十餘及び加の棚を度口まで出した丈であつた。堀之内家主に元の通りに家を建て、呉れまいかと相談したるも地所は貸すが家はソチラで建てよとの事で、本願寺の庭に持ち出した品の内、入用丈を取り去り其外の品は賣つて二十七圓取つた。それから材木は外

▽藤村信虎氏……………

山貞次郎木屋より借り小屋掛をしたが一寸した事に百十數圓を費した。自分は賣掛金二十七圓の外は持たぬから吉川建助氏より三十圓山岡清兵衛氏より十五圓、羽田久次郎氏より高歩の金を五十圓借用した。それから焼いた釣金を藤崎武力屋にて打直し黒塗りにし、少し許りランプをつりて見たが大體店にならぬ。そこで國元の伯父三田屋源兵衛の力を借らんと平太郎を連れて五百圓借用の相談に行つた。處が向ふでは自家火難のために五百圓の相談に來たとは虚言であらふ彼は仲々使い手であるから貸してはならぬとの事で五百はさてをき五圓の相談も出來ぬ、それから親父の處へ田中庄平氏が行つて源兵衛伯父と相談をするやら、彼是心配の結果、地券證を抵當に直平伯父と豊助伯父との盡力で六百圓借用する事となり、親父の前で算用して受取り其夜伯父源兵衛の處へ行き、金の用意の整ふた話

をすると伯父も驚いてオマへの様なものに金を貸すものがようあつた。恩を忘れぬ様に必ず返却を間違ふなとて馳走を振舞ふた。翌朝下男に荷物を持たせ、大雪降の中をも構はず平太郎を引連れて出發し、呉に出で船に乗りて三津ヶ濱に渡り、三津ヶ濱から下り船に平太郎を乗せ、金三十圓を持たせて鹿兒島へ歸し、自分は直に大阪に上つた。岡島藤吉宅に行くと鹿兒島の大火はどうでしたかとの尋ね逐一返答して遂に自分の一身上まで語つた。岡島氏は同情を寄せて前の仕入れを拂へば後の商賣も困難であらうから、今度取る丈の代を現金拂にして先に仕入れた代金は他日儲けた時に支拂ふがよいとの深切に従ひ、二百圓丈仕入れ代を拂ひ梶田九平硝子商店に行つた。自分の顔を見ると直ぐ鹿兒島の大火話を聞かうとする、面白くもない災難の迹を語つて果ては假小屋住居の今日の状況から國元へ借金

をして爰に來た次第を逐一陳べた。實は御宅から先に伺ふ積りであつたが、都合に依り岡島に先に行つた。御宅にも借があるが何程あるか算を入れて下さい支拂致しますと申し入れた處が、主人も火災にあつた事を氣の毒に思ひ、私方も岡島氏と同様でよろしい、今度御注文の品も御都合のよい時に支拂下されば結構と、深切に云て呉れたが併し來た印に百圓丈入れて置いて注文品を受取つた、オマケに一杯御馳走になつて暇乞し、新町通り二丁目丸一ランプ屋に立寄り六十二三圓現金で品物を買ひ山中廻送店へ送つて貰ふ様に頼み西横堀の大西利作方へ歸つた。翌朝、北區の木村宇平上ホヤ製造所に行き前借三十圓を支拂ひ品物を七十圓餘注文し、それより鈴木竹ホヤ製造所に行き竹ホヤの安物三百打買ひ、そして桐重の上等竹ホヤ製造所に行き五十圓餘買ひ、天神橋通り三丁目國平嘉吉釣金製造

所に行き前借を拂つて百五拾圓の品を貸して呉れた上に大變な御馳走になりて歸つた。翌日岡島に行つて見れば貳百五拾圓の不足があつたから五拾圓入れて目錄を受取つた、別に山籠三個の火事見舞があつた。旅の用意を整へて歸國、早々安物廣告をして千圓餘りの品を一週間の内に賣つて仕舞つた。賣上金は日々大阪に送つた、時に明治二十五年の事であつた。明けて明治二十六年も盛んに商賣した此年大阪の借金は勿論、伯父に借用した六百圓も拂い、少々の小使も残つたから段々順境に向つて來た。二十八年八月留守を妻と平太郎に委せ大阪に店の品物を仕入れ、そして三十六圓でオモチヤの徽章及び付ヒゲを松屋町オモチヤ卸屋に仕入れて柳行李に一杯所持し、京都本山参拜、洛中洛外の神社佛閣を殘らず参拜した。それから山科兩御坊、比叡山、坂本の官幣大社、大津三井寺、南別所等の舊蹟

▽藤村信虎氏.....  
 を廻り廻つて奥州松島鹽釜より金華山まで参り、神名簿、佛閣拜禮納経帳、諸國寺院御判帳の三冊に印を頂戴し、各所参拜の旅費は所持せるオモチヤや付ヒゲを商ふて適當な旅費を作つた。伊豆の國下田で三宅島の桑の種が良いから之を畑に蒔き苗にて賣れば大變儲かると聞いたで、伊豆七島を皆廻つてオモチヤの品物を賣つた金で桑の種を一斗二升買ふて下田に持ち歸つた。が初の話には一升七圓位の相場と聞いたが持つて來て見ると一升二圓位である。それで遂に一斗貳拾圓で賣り飛ばして仕舞つた。明治三十一年一月十一日、福島縣岩城國平町廣島屋宇平方にて平太郎大病の電報が來た。自分は折節十里以外の四ッ倉と云ふ處へ行つた不在中で四五日を経て歸宿すれば此始末、どうなつた事であらうかと大變驚いた。會つて自分が房州館山町で六月二十日に、父が死去の電報を受けた事がある。

其時が今度も同じ様に九十九里濱の内の千倉浦で地引大漁の事を知りて行つて見ると、其魚はサンマと云ふ魚で、東京に持つて行けば儲るとの話であるから一尾壹錢八厘で百圓ばかり買入れ、東京に持ちて行き一尾三錢五厘に賣つたで九拾圓ばかり儲かつた。三四日かかつて此儲を握りて歸宿してみれば此電報實に驚いた。此時自分は斯う思ふた、モウ既に六日を経過して居るから今直ぐ歸國した處が葬式の間には逢はぬ、兎に角御經を上げるが肝要と思ひ佛參して寺僧に讀經して頂いた。父が廣島で商賣すれば病氣杯の時は非常に便利になるからと云ふのを聞かずに遠方に行つたは實に不孝の罪である、せめては親の御恩を忘れぬ爲めと、毎日朝夕二度の佛參勤行を致さばやと勤行に心を入れた、お蔭で今日まで二度の勤行は一度も缺かさずに勤めて参つた、日に依ると八度も勤行さして貰つて御恩

▽藤村信虎氏.....

の程を喜ばして頂くが、時によつては晝の多忙につれて勤行の出来  
ない時は夜の十二時になつて勤める事も往々あります。そして朝は  
毎朝近き寺院に参拜して報恩の行を辿らして貰つて居る。時に話が  
外に出ましたのが親の死に逢はぬ自分は又も悴の死にも逢はぬのかと  
思へば、どうも胸が裂ける様な思がした。が併し悴はまだ若年であ  
るから命に別條はあるまいが、若し死んで居るとしても葬式の間  
は逢はうと早速仕度を整へ歸國の途についた。歸途、御本山に参拜  
し、父の永代經をあげ、祖師聖人と蓮如上人との脇掛りの御影を申  
し受け、三部妙典、五帖一部の御文章を申請し、廣島の故郷に立寄  
り、光教坊、西光寺の兩院主を聘し、追弔の佛事を執行し、墓參を  
終へて鹿兒島に歸つた。歸着の日は大雨であつたが、信愛講の人々  
が二十四名其外近隣の人や俵が出迎に來て居つた。一同へ挨拶が済

▽藤村信虎氏.....

ひと平太郎の無事なる顔を見たる仕合せの嬉し涙に病氣の次第を問  
ふた。俵は云ふ私は元氣で今日まで病氣などの覺はないと、よく聞  
いてみれば妻が或人に頼んで電報を打つたので其實は自分が三年も  
歸らぬから、早く引歸そうとの策略であつたと、三十一年三月、廣  
馬場通泉町の谷山與助氏が、相談したい事があるから來て欲しいと  
の事で、何事ならんといつて見ると氏は云ふオマへさんは朝夕よく  
參詣が出来るで相談して見たいと思ふ、それは此頃私内に一人の僧  
侶が都合あつて泊つて居るから、どうか面倒を見て上げて頂き度い  
興正寺の僧侶にして妻を連れて、上町に小い家を借りて、米、味噌、  
醬油、皆私の方より送つて居る次第、それでどうか同行仲間に頼ん  
で忌日追弔の供養を勤めさせて下さるやうに世話をして貰ひ度と、  
自分は逐一聞き終りて、それは興正寺の方、自分共は本願寺の方

▽藤村信虎氏.....

であるから派からして違ふのみならずそんな世話をすると却つて法規を亂す恐もあるから、そんな事は御免を蒙り度と云ふて歸つた。鹽日谷山から使が見へた、行つて見れば忌日で讀經があるとして、話の僧侶が佛前に構へて居る、阿彌陀經、高僧和讃の初めの六首引があつた。自分は今奉讀の御和讃は何帖の何文であるかと尋ねたら、是れであるとして出して呉れたは一冊の高僧和讃であつた。只貫ふ譯には行かぬ、思へば今日はタツタ一人の妹の忌日であるから、自分の宅で供養の讀經をして貰はんと相談したら、心易く受合はれて其晩勤めて呉れた。で五圓の御禮を包んで出した。後日、谷山、瀬川、明石屋、自分も加はつて「モヤイ」を仕立てゝなりとも彼の僧を助け申さんと骨折つたが、骨折つた甲斐もなく一口の加入者をも得なかつたは笑止千萬であつた。一日瀬川、明石屋、自分も共に谷山に會

して先づ自分が所存を陳べた、そはかうであつた、吾々が斯く熱心にやつても一人の加入者なきは本派や大派の門徒を廻つたので興派の門徒でなかつたからではあるまいか。それは兎に角何れの宗派であらうとも佛敎の流れを汲むものは佛の恩を蒙らざるものはないから佛恩講の講社を結んで、そして其講の内より世話する様にしたら如何であらう、掛金の大きなは繼續上に差支を生ぜぬとも限らぬから先づ一口三十錢か五十錢位の掛金として組立ては如何と思ふ丈の事を陳べた。谷山熊次郎氏先づ賛成の意を表し、三年か五年には掛金を戻す様、そして六ヶ月は休みとし休みの内の利を取りて鹽津師の手當やら會合の費用に當てねばなるまい、瀬川氏や谷山氏の心配で立派な事が出来やう、自分も五十口位は作つて見やう、談中端にして谷山の息子、熊次郎氏の云ふには、時に明日より鹽津師の米代



からしてないが如何してよいか、此講成立つも結果は三年以後でな  
くては使用の途は立たぬ、どうして此場を凌ぐかとの問題であつた。  
自分は此事に就ては佛恩講に入つた講員の家を訪ふて忌日供養の勤  
行をするならば多少の志を呉れぬものはないから一日に十軒行つて  
も一圓と二圓の布施は貰へる、そうすれば講員に加入したものも招  
待の手敷をせぬで勤をして頂くから大に便利で、且つ鹽津師も縁  
に依つて法を勧める傳道の資にもなる一舉兩得の策であるまいかと  
云つた。處が一同皆賛成してさらば直に講則を設け講員を募集する  
が第一の要領として左の通りなものを組織されたのである。

佛恩講の旨趣

本講は佛恩講と名稱し、尊皇奉佛を旨として、益々宗教の實踐を  
はからん爲めに組織せるものにして、傍ら同朋の力をかりて利子の  
積立を成し、以て教會堂を建築し、同一念佛の行者相集りて佛徳讃  
嘆の道場に當てんと思ふ。加之、竣工の曉には各講員の懇志を表彰  
せんために紀念碑を立て、加入者の姓名を録し、永く萬世に傳へ依  
て以て、各講員の先祖の法名をも誌し、本堂落成の上は春秋兩度永  
代經供養會を執行し、恭しく講員の逝き給へる靈を追弔せん事を期  
す。

發起擔當人 藤村信虎

講則

一、本講掛金は壹口參拾錢と相定め、毎月十日より十五日限り收納



話は御断りになつた。自分は一生懸命に奔走して六十口の加入數を得た。自分は二十口加入し、谷山氏三十口、木原氏二十口、都合百三十口出來た。四月と十月とに總會を開き、其日は午前六時一發の花火を揚げ八時自宅出發の相圖として又一發の花火を揚げ、そして開會の際一發の花火を揚げ、自分は先づ開會の辭を述べ且つ計算報告をなし、次に鹽津師の講話、それから小野普耀師の演説、それが終るを相圖に佛恩講旗を二本仕込んだ花火を揚げて閉會、餘興に移りて宴会となり、酒折詰、すし並に汁粉、餅の券を二枚宛會員に渡し最後に花札を引かせるなど甚だ盛會をさわめた。之ぞ最初の會合で宴會は大門口の月見亭であつた。爾來毎年二回繼續して益々盛に行はれて居る斯て二回目より三十錢の掛五十錢に改め、枝元喜之助氏、久留市郎左衛門氏の二名を出納掛に加へ、藤村平太郎氏を書記とし、宴會

の時に〇〇模合を作りてはと相談致した處、直に六十三人の賛成者を得た。そして自分は募集したる會員を皆世話係とした爲めに千四百四十口の多數に達した。それから段々盛大に進んで來て壹ヶ月毎に五百七十圓の集金を見るに至つた。此に於てが佛恩講の大厄とも云ふべき難題が起つた、と云ふのは、そもその起りに永野五平と云ふものに入會を進めたら、夫婦で二口加入したが其年四月の總會に出納決算の報告をした其金額が思ひの外の大金であつたから夫が爲めに永野胸中に一物の暗鬼が生じて來た。折節鹽津師が忌日の勸めに行つたで永野は鹽津師に向ひ、藤村はかやうな大金を預り居るは必竟、商賣の資本金に使用しては居ないかどうか勝手に使用して居るかも知れぬ、近頃藤村商店の非常に盛大になつて行くのは確かに之が結果であらふと思ふ、で出納係を止めさるがよいとも云ふ。そ

ここで師は云ふ、其の世話を真面目にする人がないではないかと。それはあります私でもしてあげるところ永野は云ふた。全體、永野五平は自分と同商賣であるが自分の店は皆様の御最負で日々盛大に進んで行くのに引かへ彼永野の店は甚だ商賣が振はないから、妬みの野心が起つたらしい。其後二三ヶ月間鹽津、永野の兩人は會員を訪問して破講の運動をやつたと云ふ。自分は一向知らなかつたが一日天島鶴助氏が來宅されての話に、貴店が今日盛んになつたのは佛恩講の金を使用して味い汁を嘗めて居られるからだ、人の取り沙汰自分は思ひがけなき此挨拶に驚かざるを得なかつた。徐ろに口を開いて天島氏に申あげた、彼掛金は決して私一人の自由になるべきものでない、谷山、木原兩氏と三人の預りなれば、どうして自分が勝手に使はれませう、谷山氏でも木原氏でも聞いて見れば分る。其後

世話人が二十人餘吉野屋に集合し何か協議する處があつたと、自分の宅に來りしものは、齊之平助次郎、遠矢助太郎、明石屋の弟太郎、福田屋の番頭友吉、今井友太郎の八名であつた。自分は今參詣より歸つて御内佛に禮拜せんとする時であつたから皆には煙草盆をあてがふて、直に念佛誦經に打立つた。——皆様御揃で、何の御用でございますか、良い金儲でもあるなら私も組に入れて貰い度い、イヤそんな事で參つたのではないが、時にアナタに御相談があつて參つたので、實はアナタの事で、夜前は吉野屋で——齊之平がそれじや御無禮ながら申しませう、彼の佛恩講の掛金を私共の世話した分猶爰に來て居られる方々の分も共に返金して貰い度、谷山氏や明石屋さんにも相談したら藤村氏へ相談して呉れよとの御話であつた、で參つた次第である、何卒宜敷ねがいます。ア、さうですか谷山氏

▽藤村信虎氏……………

や明石屋氏は佛恩講を止めると云われますか、イヤ止めるとは申しませんが私共が其金を返して貰い度と云ふので先方でも藤村氏が承知なら返済すると云つて居ると福田の友君が助言した。まだ外にも返して貰い度と云ふものも居りますが先づ私共十三人丈行つて呉れよとの事で吾々がかく參つて申上ぐる次第である。それはどうも合點が行かねるネ、佛恩講に掛る時は、どう云ふつもりで御掛になつたか、人を入れる時どう云ふてゝ入れになつたか、帳簿の裏にはどう書いてありますか、全體アナタ方は皆世話係りの歴々たる人ばかりではありませんか、そしてアナタ方は最初から加入されたのみならずよく趣意をのみこんで他の人々を御勧めして本講の爲めに大なる勞を惜まぬ世話方であつて、かく返金などを迫るとはそも何故か其意を得るに苦しむ次第だ。明石屋の舍弟、辰太郎氏を始め其他の

人々が、とりどりに休むの引くの除けて貰ふのと種々の珍言を吐くものもあつた。此に至つては自分も黙つては居られない、皆サンはおかしい事を云ふが人間じやあるか、人間なら引くの休むの除けのと云はれるものではない。佛恩を知つたものばかり加入すると云つて来て今更講則を無視して小言を云ふのは人間じやない虫同様じや齊之平は人間じやと云つたが虫けらにも劣つて居る癖、人間じやとはよう云へる、今朝来た時三人ばかりして庭にある板硝子入の箱の中に品があるかないか、杖で突いてみたり竹で突いてみたりしたのは齊之平が一番先にしたやうであつたが、有つたらどうする無かつたらどうする、あらふと無からうと入らぬ世話、一箱ならず幾箱も突いて見たは何たる無禮事ぞ、それが人間のすべき事か、虫けらにもおとつた奴じや、全體谷山氏や明石屋氏が良すと云つたと云ふが

どうもあかしい、三年六ヶ月満期が来たら戻す事は分つて居る、夫迄は戻さぬ、戻す人があるなら其人から受取れ、自分は戻す譯がない、引きたい者は引け止めたい者は止め休みたいものは休め、それは皆の自由にするがよいが、掛た金は講則通り満期来ねば、戻されぬ、いろはのいの字も知らぬ人なら佛の恩も知らずに済まふが、荷もいの字の分る人なら佛の恩を知らずに居られよう、自分は皆さんが退講して仕舞ても止めぬ一人でもやつて行くオハン達の様な虫同様なもの話しても所詮がないから早う戻れと一聲怒鳴ました。處が一人去り二人出でコソコソ這がやう様に歸つてしまつた。其夜吉野屋より右の虫けら同様の人々が使を以て呼びに来た。自分は虫けら同様な人間と一處に呑む事はイヤじやと断つたが再三の使を受けて止むなく出頭した。途すがら思ふに何でも彼等が今朝の敵と思

ひ、打破主義を取つて自分をどうにかするつもりかも知れぬけれど佛恩講の爲めに責めらるるなら打たれても敵かれても構はぬとの決心でやつて行た。座敷に通れば案外、御馳走が澤山、出納係の一人久留市郎左衛門其外世話掛四十餘人集まつて居た。久留氏の云ふには藤村氏盃を重ねて頂戴——甚だ御無禮ではあるが申上たい事があるつて御來光を願ふた譯だがそれと云ふも外ではない、今朝佛恩講の事に付て御相談に上つたらエライ御立腹の容子であつたとか、何はともかく、アナタ一人の佛恩講ではあるまいから、多數の講員の輿論に任せ一應返しては如何哉との挨拶、自分は立腹と云ふことはない、たゞ講則の下に立つて御話をするまでである私が勝手に返すの返さぬのと云ふのでは決してない、返す時が来たら返へすなと云つても返さずに居られぬ。それは御尤もですが、多數の人のなすがま

まに任せしめたが良いではないか、谷山木原兩氏も承諾するそうだがアナタ一人が判をなさらぬとはそれはアナタの意氣地と云ふもの、と云はれても自分は三年半の時日が立ねば天地が逆になつても判はせないと言つた。外の事なら多數にまかれてもよいが佛恩講ばかりは多數にまかれる譯に行かない、こんな話は酒會に云ふべき事でない、どうか素面の時に話して貰い度、明日でもお話しませう酒代は何程ですかと聞くと酒代などは銀行にある佛恩講の金でと、自分はそれを何を云ひますか、佛恩講を破壊する酒代を佛恩講の金でするとは言語同斷の至りである。そんなら判をして呉れるか。イヤとにかく明日改めてお話を承はらふ。暇乞をせんとした方が一方では氣晴しに池田屋で一杯のまふと云ふものもある又一方には鹽津氏の宅に来て呉れよとの使が來たで行にやなるまい、藤村さん行かう

▽藤村信虎氏……

じやないかと勸めるは天島杉村の兩氏であつた。さそはるゝまゝに行つて見ると、鹽津氏を中心として左に永野五平右に遠矢助太郎の兩名が控へてあつた。時の挨拶から夜更に來て欲しいと使を立て、甚だすまぬなど彼是の世辭がすむと、鹽津氏は膝を一步のりだして云々と出たのはこゝである、アナタに御苦勞をかけたのは實は彼の金を返して貰い度の一件である、此間、谷山、木原の兩氏の處に相談に行つたら兩人とも承諾されて居るのでアナタ一人承諾すれば何の云ふ事もなしに濟むから一ツ判をして頂き度。かくと聞くなり自分は、貴僧は谷山や木原の兩家へ相談にお出でになつてそして自分ば此に呼つけて外がそうじやから君一人で小言を云ふなと云はたかとして人を馬鹿にするも程がある、アナタは思ふに違ふた馬鹿じ

▽藤村信虎氏……

▽藤村信虎氏.....

や、初め難義した時に世話になつた事は打ち忘れて人の味い口車に乗つて素志を變ずるものとは一時も一處に語がイヤじやア歸らうと天島板村兩人と其まゝ歸つた。其翌日、講外の川下直太郎氏が來訪して云ふには、請員より積んだ金が澤山銀行に預けてあるそうじやが、アナタ一人の承諾が無い爲めに受取る事が出来ぬとの事、今日講中の人々より頼まれて私は參つた譯、谷山木原兩氏とアナタとの三名の調印がすまねば取れぬからどうか一つ判をしてやつて呉まいか。それは御多忙の中に御苦勞をかけてすみません、が併し佛恩講の事をらほつておいて下さい、鹿兒島で男立をする貴氏で貴氏が口を入れた事は何でも首尾取らん事はなからうけれ共此佛恩講ばかりはどうか構はず居て頂戴と、潔く斷つた。其後毎日來訪する事四五日を重ねて倦まぬ、遂に出納係りの枝元喜之助氏と同伴して來

訪、結局、苦情の付いた佛恩講は此際破壊して第二の佛恩講をすこやかに作るが良策ではないか、それで此は一應云ふままに解散して直に又より以上の立派な佛恩講を組織して真面目の會員を求めた方が得策の上々であるとの相談で、茲に一先づ調印して一段落を告げた。池田屋で解散の宴を開き掛金はそれぞれ適當の方法で返し、講の諸道具は入札に付せしが四十八圓の入札で自分の手に落ちた。それから改めて第二の佛恩講が生れた。それが今日現在の佛恩講である。當時出納係は板村と自分とで世話係六名に決し、大體に於ては前身のそれと同一の歩調を取つた。初回は八十七名満三ヶ年、六ヶ月の休み無しに、六ヶ月目に總會を開き、二回目は利子で費用が足らぬから止むを得ず三ヶ年掛け六ヶ月休みの方法に復活した。三回目には掛金を返し而し雜費を引いた殘金が十八圓ばかりあつた。四

▽藤村信虎氏.....



▽藤村信虎氏

回目には百三十口になつた爲め、掛金を返し雑費を引き去つた残金が六十七圓あつた。五回目には掛金を返した残金が百圓以上に上つた。六回目には百七十口になつたで世話人木場常次郎氏を加えた。大正五年四月掛金等を除いて差引二百圓餘残つた。前々の残金を合計して元利共に六百圓に上つた。第七回目には世話人を八名増加し出納係は板村槌之助氏で世話係に丸田平左衛門、伊達熊太郎、川野十太郎、鶴田龍太郎、伊達利吉、片川彌市、土井鶴松、山本元三郎、木場常次郎、栗田音松、片岡和三郎、新屋敷千代子、濱田サダ子、有村サワ子、兒玉ミネ子の諸氏の十五名となつた。講員三百七口になつて益々盛況を呈しつゝ、進んで發展の旗色をあげて居る。此間本講の爲めに講話の勞を煩した人々は、山名輪番、萩生布教師、小野教誨師、原布教師、櫻井布教師、白水輪番、森重布教師、乘永輪番

林師、大洲順道司教、井上文學士、小池輪番、江上師、乾井師等の各位を招待して春秋二會大會を開催し法澤にうるはうて同朋の胸襟をの語らい合ありがたさは筆や紙には盡ない。大正五年三月、四月にかけて見真大師の降誕會を期して丸田平左衛門氏と共に發起人となり。聞信會なるものを組織した。生れて日淺きも五十餘名の會員を出し、毎月十錢宛の會費を報じて居る。會費一同の法味を増上せんとために知識の法話を乞ふて居る。餘り會員が多くなるも調子が亂れるかも知れぬから、數の上には重きをかず。着々實行の同志を語り合ふて共に共に人生の眞意義を味ふて眞の宗教的生活を辿らんと心がけつつある次第である。

▽藤村信虎氏



大正六年六月二十一日發行  
 大正六年五月十八日印刷  
 聖親 魯 奧 附  
 上製定價金五拾五錢  
 並製定價金四拾錢  
 郵稅金六錢

大正六年五月十八日印刷  
 大正六年六月二十一日發行

不許  
 複製

著者 岩尾 僧 梁  
 加藤 清 正  
 宮崎縣西諸縣郡飯野村

印刷者 中村 彌 助  
 印刷所 日本警察新聞社印刷部  
 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

發行所 東京芝愛宕町貳丁目  
 電話芝四八八四番  
 振替口座東京八一五七番  
 日本警察新聞社  
 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地  
 發賣所 鹿兒嶋市 谷村書店 同 吉田書店

警 察 發 行  
中 日  
東  
新 聞 社  
京

325  
508

終